

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第5回

## 藤田嗣治と〈聖地〉モンパルナス ——失われた居場所を求めて

1953年、かつて多くの画家たちのモデルとして時代に君臨したキキ・ド・モンパルナスの葬儀に、藤田<sup>つぐはる</sup>嗣治が参列していたことには、前回のこの連載で触れた。このときの彼の胸中を、狂乱の時代の聖地・パリのモンパルナスを念頭に想像してみたい。

藤田嗣治ことレオナル・フジタ (1886-1968)。近代ヨーロッパでもっとも名声を博した日本の画家である。「藤田」をもじった Foufou (fou はフランス語で道化を指す) の愛称で親しまれ、1910年代末から1920年代のモンパルナスで、いつも人の輪の真ん中にいた。1922年、「素晴らしき乳白色」を肌の描写に用いた《ジュイ布の裸婦》が評判になり、世界的名声を得た。日本では《寝室の裸婦キキ》と呼ばれることもある作品である。

1913年に船で到着したフランスでの最初の住居は、モンパルナスのオデッサ通り28番地の質素な一室。貧しい下積み時代、一旗揚げようと世界から集まった若い画家たち (モディリアーニ、キスリングといった面々) と親交を結んだ。その後1923年までの転居先もすべてモンパルナス界隈だった。1950年から1968年までの18年間は、モンパルナスに住居兼アトリエを構えた。モンパルナスはまさに、藤田にとっての“庭”だった。

モンパルナスを離れていた時期には、創作の場を世界に広げながらも、別離や悲運が折り重なった。1930年代、詩人ロベール・デスノスへ走った妻ユキことリュシー・バドゥを追わずに、新たな恋人マドレーヌ・ルクーを伴って南米、北米、そして日本へと赴く。しかしマドレーヌの事故死という悲運に見舞われる。さらに1940年、戦禍を逃れフランスから帰国した後、国の要請を受けて戦争画に取

り組むが、戦後は日本美術界から“戦犯”の汚名を着せられる。祖国に「捨てられた」失意の画家は、着の身のままで1950年にフランスに戻った。

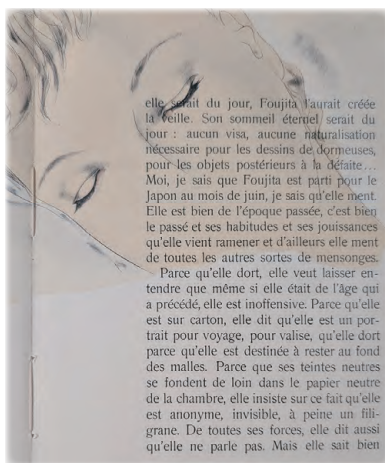
しかしモンパルナスはそんな藤田を見放さなかった。1950年のクリスマス、画家は1冊の挿絵本を通して、かつての祝祭性の時代とひそかな邂逅を果たす。藤田不在のフランスで1941年に出版された、ジャン・ジロドゥ作『イメージとのたたかい 藤田の1枚のデッサン』(Combat avec l'image, dessin de Foujita) である。戦前に藤田が描いた1枚の絵を、どういう経路でか入手したジロドゥが、藤田の不在(「フジタはいない、彼は6月に日本に帰国したから」と、狂乱の時代の喧騒に思いをはせるひとり語りのテキストを著し、その絵をスライドショーのようにレイアウトした1冊である(下図参照)。この本を入手した藤田は、表紙と裏表紙の裏に墨で、祈るような表情の女性像を丁寧に描き、ずっと大切に保存した。

モンパルナスのカフェ「ラ・ロンド」の常連だった物静かなジロドゥが、キキや藤田のお祭り騒ぎを遠くから眺めたことは何度もあったに違いない。ドイツ専門の外交官でもあったジロドゥは、絶望のナチス占領時代の終わりを見ずに、1944年この世を去っていた。キキの評伝を著したルー・モルガールは、葬儀に参列した藤田が

「もう二度とモンパルナスに戻ることはない」と言ったと記す。しかし当時の藤田は、再びモンパルナスに居を構えていたはずである。この決別のことばは、もはや過去となった狂乱の時代そのものに向けられていたのだろうか。

1955年、藤田はフランスに帰化し、1959年にカトリックの洗礼を受ける。晩節は、裸婦からも祝祭からも遠く離れ、宗教画制作へと傾倒していく。

大修館書店『英語教育』8月号掲載  
転載禁止



Combat avec l'image, dessin de Foujita. (部分)  
(宮城学院女子大学所蔵)



本文の参考文献は  
QRコード参照